

1 【出題の意図と対策】

文学的文章（小説）の読解です。ここでは、小池昌代の『地面の下を深く流れる川』を題材に、登場人物の心情や、文学的な表現の意図を読み取ります。小説を読むときには、それぞれの登場人物の言動や様子、内面の描写などに注目して、どのような出来事が、どのような心情に結びついているのかをとらえながら読むようにしましょう。そのうえで、それぞれの設問について、何が問われているのか、選択肢などに明確な根拠があるかどうかを確認しながら解答していきましょう。

【解答】

- ① いまさら      ㉓ つど
- ② 弓術部には自分の居場所がなく、続けられるかもわからないのに、部活動を続けていることへの違和感。（47字）
- ③ ウ
- ④ エ
- ⑤ X    イ
- ⑥ Y    自分の心

【解説】

② ポイント《人物の心情を正しく理解できるかどうか》  
傍線部⑥は、「ねえ、サエキ、今更だけど、なんで弓、やろうなんて思ったの？」という矢部先輩のこたばを受けています。弓術部のサエキは、「放課後は、ほとんど毎日、弓道場で弓を引く」一方で、「なんだかここにも、自分の居場所はなくて、続けられるかもわからなくて。」とも思っており、この状態に「違和感」を感じています。「違和感」とは、食い違いを感じて、しつくりこない感じという意味です。前向きな気持ちを持って部活動に取り組んでいるわけではない、という思いと、自分は弓術部に所属して、ほぼ毎日部活動に取り組んでいるという現実の間にずれを感じているのです。

③ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》  
矢部先輩は、弓術部での活動を振り返り、「あたしが自分で不思議でならないのは、こんだけ下手なのに、めげない自分のこと。」もはや好きか嫌いかわからないのも、わからないの。ただ弓に引つ張られてるのは事実。」と言っています。上手なわけでもなく、弓を好きか嫌いかわからないが「弓に引つ張られている」自分にとって、弓を選んだ理由なんか「きつと、わからない」のだと、矢部先輩はサエキに回答しています。

④ ポイント《語句の知識があるかどうか》  
引退しても弓道場にやってくる矢部先輩は、後輩の練習を見ている、指導をするわけではなく、ただ見ているだけです。このように近い語句は、何もしないで、ただ見ているという意味の**エ**「傍観する」です。**ア**は注意して見る、**イ**はじつと見る、**ウ**はこだわりなどを捨て、あきらめる、という意味です。

⑤ ポイント《表現技法とその意図を理解できるかどうか》  
Xは、傍線部①に用いられている表現技法の名前が入ります。「どつしりと残り続ける」という普通の語順を入れ替えることで、自分の存在が「残り続ける」というサエキの思いを強調しています。Yは、矢が的から外れると、どのように思うのかが入ります。「的から外ればまるで、自分の心が受け入れてもらえず弾かれてしまったようにゼツボウする」をおさえ、Yに入ることばを考えましょう。「自分の心」が答えとなります。

⑥ ポイント《人物の心情を正しく理解できるかどうか》  
「残身（心）」は、弓道においては、気力の充溢した状態にある矢を離れた直後の姿勢です。矢部先輩について、サエキは「引退してもなお、自分に迷い、そうして心を弓に残している」と考えています。部活動の引退を迎えても、弓への思いが体に残り、自分に迷い、毎日のように弓道場へとやってくる矢部先輩の今の状態は「その姿が矢を離れたのちの、一人で立つ『残身』そのもの」だとサエキは感じているのです。

2

【出題の意図と対策】  
説明的文章（論説文）の読解です。論説文は、あるテーマに関する研究内容やデータ、客観的な事象などについて、筆者が考えを述べた文章です。ここでは、鈴木孝夫の『日本語教のすすめ』を題材に、言語の側面から見た異文化理解に関する筆者の考えをとらえます。論説文を読むときには、その文章が何について書かれているかを理解し、筆者が何を根拠に、どのような主張を展開しているのかを読み取るようにしましょう。

【解答】

- ① ① d    ① f    ① 伝統
- ② ウ
- ③ エ
- ④ 実学実用のために
- ⑤ X    人間の交流
- ⑥ Y    ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ⑦ ア

【解説】

② ポイント《助詞の意味・用法を理解しているかどうか》  
傍線②の「の」は主語を示す「の」で、「が」に置きかえることができます。同じ意味・用法の「の」を含む文は**ウ**です。**ア**は直前の「日本」という名詞と結びつき、あとの「生活習慣」という名詞に係る連体修飾語を作る「の」、**イ**は接続助詞「ので」の一部、**エ**は、ここでは「ところ」「場面」といった名詞の代わり用いられており、体言の代わりに用いられる「の」です。

③ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》  
筆者がフランス語とドイツ語とロシア語について述べている内容をとらえましょう。**ア**は「明治時代の日本で一番広く学ばれていた英語」、「遅れた日本を強国にするために、この三つの言語に絞って学ばれた」という部分、**イ**は「軍事経済力を高め、国防や文学について学ぶ」という目的を三つの言語に共通の目的としている部分、**ウ**は「フランス語とドイツ語は英語と同様に蝶と蛾を区別することばをもち」という部分が不適切です。

④ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》  
直後の段落の冒頭に「その大きな原因のひとつは」とあるように、筆者は直後の段落で傍線③の理由を説明しています。その中で、「要するに」という接続語を用いて、「外国語は主として実学実用のために学ばれた」と説明をまとめています。

⑤ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》  
Xには、現代における諸外国との関係の結び目が入ります。最終段落に「諸外国との関係も……いまや国民が直接外国人と交わり仕事をするといった人間的な交流へと大きく変わってきました」とあることをおさえましょう。Yには、国際理解において求められる、異文化を理解する姿勢が入ります。最終段落の後半に「自分たちの理解しにくい変わった外国の風俗習慣や言語上の相違、すなわち「異文化」に見られる自国文化との相違を、どちらが優れているか劣っているかといった価値観抜きに、人類のあるがままの多様性の表れとして受け止めるべき時代になった」とあることをおさえ、指定字数に合うように工夫してまとめます。

⑥ ポイント《文章の構成や内容を正しく理解できるかどうか》  
最終段落の「外国語教育の中でも、実用性とは一見関係なく見える異文化理解をこれまで以上に重要視する必要がある」といった筆者の考えを踏まえると、筆者が冒頭で示している「蝶」と「蛾」に対する日本人の感覚の違いは、日本語が「蝶」と「蛾」を区別していることに関連があると考えられます。**イ**は「英語と日本語の違いを示す」、**ウ**は「実用的な言語であるという日本語の利点」、**エ**は「筆者自身が抱いている蝶への好感と蛾への嫌悪感」という部分が不適切です。

3

【出題の意図と対策】

俳句とその解説文の読解問題です。ここでは、松尾芭蕉の俳句や弟子である支考の文章について、長谷川權が解説を書いたものが題材になっています。限られた字数での表現の中に、作者の一貫した姿勢や独自の視点を見出す俳句は、難解なものに感じられるかもしれませんが、解説をしつかりと読んで設問に答えましょう。

【解答】

- ① こうむらしめんか
- ② エ
- ③ I **例** 現実から心の世界を開いた（12字）
- II 俳句の歴史
- III 芭蕉が旅したあと
- IV お墨付き

【解説】

- ① ポイント《かなづかいの知識があるかどうか》  
歴史的仮名遣いの「ア段音十う」は「才段音十う」に直します。また、助動詞の「む」は「ん」に直します。
- ② ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》  
Xは、「古池の句は蕉風開眼の句である」といわれた多くの人が、どのような気持ちになっているのかが入ります。「それほど有名な句であるにもかかわらず、この句は謎に包まれている」、「古池の句は詠まれてから三百年間、誤解されてきた名句ということになるだろう」といった表現に着目しますが、「この句は謎に包まれている」というのは研究者である筆者の考えであり、多くの人は、その謎に気づかないまま「何となくわかった」ような気持ちになり、その結果として「三百年間、誤解されてきた」という筆者の見解をとらえる必要があります。Yは、支考が「一人、江戸から松島、象潟へ旅をした」ことが、どのような意味を持つているのかが入ります。「支考は蕉門に入ると、元禄七年冬、芭蕉が大坂で亡くなるまでの四年あまり、そのかわらにあつた」、「上方でも芭蕉に従い、その臨終を看取った弟子の一人となる」といった表現に着目し、「芭蕉のもとを離れた」ということばが入ると判断します。「芭蕉に異を唱えた」ということばは、「芭蕉にいかにか心酔し、熱心に吸収しようとしていたか」という支考の様子や、支考が書いた『葛の松原』が「芭蕉が内容を保証した」ものであつたことに合いません。
- ③ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》  
Iは、古池の句が蕉風開眼の句といわれる理由にあたる内容が入ります。本文の最後の二段落で述べられている、「蛙が水に飛びこむ音が芭蕉の耳に聞こえた現実の音であるのに対して、古池は芭蕉の心の中に現れた想像上の池である」、「蛙が水に飛びこむ現実の音を聞いて古池という心の世界を開いた」、「現実のただ中に心の世界を打ち開いたこと、これこそが蕉風開眼と呼ばれるものだった」という内容をおさえ、指定字数に合うように、簡潔に解答をまとめましょう。IIは、支考が作つたといえるものが入ります。支考について述べた部分に注目し、筆者が「もし、この人が芭蕉の弟子にならなかつたら俳句の歴史はずいぶん違うものになっていただろう」と述べていることをおさえましょう。IIIは、『葛の松原』において支考がどこを旅したのかが入ります。具体的には「江戸から松島、象潟」を旅したのですが、指定字数に合わないのので、「江戸から松島、象潟」を言い換えている言葉を探します。「三年前、芭蕉が旅したあとを慕つてのことである」に着目しましょう。IVは、支考が書いた『葛の松原』がどのような俳論書であつたのかが入ります。空欄の直後で「である点が重要である」とあるのをおさえ、『葛の松原』についての説明を読み進めると、「それよりもっと大事なことは、……つまり、芭蕉が内容を保証したお墨付きの本なのだ」とあるのが見つかります。ここから、空欄に入る「お墨付き」を答えとします。

4

【出題の意図と対策】

近年「読む」能力とともに、「話す・聞く・書く」能力の育成に力が入れられています。入試においては、「書く」能力を判定する記述式の問題とともに、スピーチ・発表・話し合いなど、「話す・聞く」能力を判定する会話形式の問題も頻繁に出題されています。話し合い形式の問題では、話し合いのテーマや話し合いで主張されている意見とともに、問題で用いられている資料の意図も正確に読み取ることが大切です。普段から資料を使った問題などに関心を向けて、その内容や用いられている資料のポイントを頭の中でまとめる訓練をするように努めましょう。

【解答】

- ① 積極的
- ② エ
- ③ イ・オ（完答）
- ④ **例** 自分の意見を押し通そうとするという回答が最も多い。だから、相手の主張もよく聞き、良いところを認め、一緒によりよい結論を出そうとする姿勢を見せるのがよいと思う。（79字）

【解説】

- ① ポイント《対義語の知識があるかどうか》  
「消極的」とは、自分から進んで物事をしようとしないうり様子や否定的であることを表すことばで、対義語は「積極的」です。
- ② ポイント《資料を論理的に読み取ることができかどうか》  
「知美さんの意見が論理的なものとなるために」という設問文の条件に注意する必要があります。知美さんは、【資料I】から読み取つたことをもとに「自分にコミュニケーション能力があるかどうかを意識する人が年々増えてきている」という考えを述べているので、その考えの根拠となる内容を考えます。Aは「三倍以上に増えている」という部分が、資料の読み取りとして不適切です。Iは資料の読み取りとしては適切ですが、「……意識する人が年々増えてきている」という知美さんの考えの根拠としては不適切です。Uは資料の読み取りとして不適切で、「あまりない」と「まったくない」の合計は増えていますが、増えた割合は10%には達していません。Iは資料の読み取りとして適切で、知美さんの考えの根拠としても適切だと考えられます。
- ③ ポイント《発言の特徴を理解できるかどうか》  
Aは、「自分が本で得た知識とは異なつた傾向が見られる」と指摘している」という部分が不適切で、知美さんは「以前読んだ本にも、……と書かれていたよ」と、資料から読み取つた内容と本で得た知識が一致することを述べています。Iは、【資料II】を見て発言している陽子さんが、「お互いの価値観を調整し合う」という知美さんのことばに「結びつけることができそうだね」と言っていることに合います。Uは、大樹さんが「博志の発言の中ではつきりと理解できなかった部分について質問をしている」という部分が不適切で、大樹さんは博志さんの発言に対して質問をしています。Eは、「話し合いの流れを元に戻すために博志の発言を反復している」という部分が不適切で、知美さんの二回目の発言は、大樹さんの発言に対する共感を述べているのみです。オは、「自分の意見を主張する力のほうが重要ではないかな」という博志さんの意見に対する、「それは相手との関係にもよるのではないかな」という大樹さんの意見や、大樹さんの意見に共感を示した知美さんの発言を、博志さんが納得して受け入れ、「相手との関係性」という知美さんのことばを引用しながら発言をしていることに合います。
- ④ ポイント《資料を適切に利用して、論理的な文章が書けるかどうか》  
「相手と意見を交換し合うときは、どのような態度で相手に接すればよいか」について、【資料III】からわかることを根拠として書きます。最も数値の高い項目は、「自分の意見を押し通そうとする」です。これをふまえ、二文目に、どんな態度で相手に接すればよいかを考え、まとめるとよいでしょう。